

「使動用法」再考

——陳承澤の「活用」説をめぐって——

石 村 広

1. はじめに

古代語では、自動詞と形容詞のみならず、名詞や数詞のような実詞にも使動用法が認められる。定説では、これらの品詞が目的語（使動賓語）を取ることができるのは、「活用」によって「使動詞」（または「致動詞」）に転換するからだと説明される。しかし、この分析法は、使動用法に生じる使役義を文中の述語成分に還元している点において、問題があると言わざるを得ない。

厳密に言えば、使動用法は、統語論の領域において扱うべきである。その使役義は、述語と目的語との意合的關係、つまり語順から生じる。使動用法の文法的意味は、「ゼロ形式」で実現するのである。残念なことに、陳承澤1922 [1982] の分析には、統語論の視点が欠けていた。彼が解明に力を注いだのは、馬建忠の『馬氏文通』（1898年）同様、古代語の「字類^①」、すなわち品詞の分類とその用法だったのである。

本論では、以上の観点から、「字類（品詞）活用」という西洋由来の分析法を批判的に検討し、使動用法が統語的範疇に属するものであることを述べる。

2. 先行研究の問題点

2.1 従来の分析

周知の如く、使動用法という文法概念を初めて正式に提示したのは、陳承澤1922 [1982] である^②。彼は「特別的非本用的活用」という項目の中で、これを「他動詞以外のものが他動詞に変化し、しかも特に“致然”（～たらしめる）の意味を含む時、これを「致動の用」と云う」（73頁）と説明する。この分析は、のちの研究者に大きな影響を及ぼした。

陳承澤對各類詞的活用情況作了深入、細緻、全面的分析研究，不僅在中國語法學史上是空前的，而且直到今天還有啟示作用。尤其是他在中國語法學上首次提出的“致動”說和“意動”說，具有重要意義。後來的重要語法著作大多沿用此說。

[陳承澤が各品詞の活用の状況を深く、仔細にかつ全面的に研究したことは、中国語文法史上空前のことであるばかりでなく、今日に至るものなお極めて啓示的役割を果たしている。とりわけ彼が中国語文法史上最初に提出した「致動」説と「意動」説は重要な意義を持っており、その後の重要な文法書も多くはその説を踏襲している。] (龔千炎 1997: 49)

龔千炎はこのように指摘し、その実例として、楊樹達『高等國文法』、呂叔湘『中國文法要略』、王力『漢語史稿』、王力主編『古代漢語』を挙げている。そして、この「活用」は文法研究者だけでなく、現在の大学や中高の国語の教員にも普遍的に採用されている、と述べている。

楊柏峻・何樂士 2001:532-537にある用例と説明を使って、具体的に見てみよう。使動用法は、通例、自動詞と形容詞に現れるが、名詞や数詞、方位詞などにも認められる⁽³⁾。下線で示した語が、それらに該当するものである。

I. 自動詞の「活用」例

- (1) 莊公寤生，驚姜氏。(『左傳』隱公元年)

[莊公は逆児で生まれて、母の姜氏を驚かせた。]

- (2) 項伯殺人，臣活之。(『史記』項羽本記)

[項伯がかつて人を殺したとき、私は彼を救ったことがある。]

II. 形容詞の「活用」例

- (3) “既庶矣，又何加焉？”曰：“富之。”(『論語』子路)

[[衛の人口が] 多いのは結構ですが、その上何が必要でしょうか」と聞かれると、孔子は「彼らを富ませることだ」と言われた。]

- (4) 故天將降大任於是人也，必先苦其心志，勞其筋骨。(『孟子』告子下)

[故に天が重大な任務をある人に与えようとする時には、必ずまずその人の精神を苦しめ、その筋骨を疲れさせる。]

III. 名詞の「活用」例

- (5) 宋人皆醢之。(『左傳』莊公十二年)

[宋の人は彼らを処刑して塩漬けにした。]

- (6) 乘勢則哀公臣仲尼。(『韓非子』五蠹)

[権勢によれば、哀公でも孔子を臣下とすることができる。]

IV. 数詞の「活用」例

- (7) “可三二《京》，四三《都》。”(『世說新語』文學)

[(この文章は) 従来賦された二京と並んで三京となり、三都と並んで四都となるほどのものだ。]

V. 方位詞の「活用」例

- (8) 我疆我理, 南東其畝。(『詩經』小雅・信南山)

[私は境界を区切りあぜを定めて、畝を南に東に走らせた。]

上の用例を見ると、本来は目的語を取ることができない語が、その後ろに「使動施事賓語」と称する目的語を従えている。これは、述語の位置にある語がそれぞれ「活用」によって「使動詞」(または「致動詞」)に転換したためである。古代語では、一部の他動詞にも使動用法を持つものがある⁽⁴⁾。

VI. 他動詞の「活用」例

- (9) 嘗人, 人死; 食狗, 狗死。(『呂氏春秋』上德)

[人に食べさせるとその人は死に、犬に食べさせるとその犬は死んだ。]

- (10) 故不如先鬥秦趙。(『史記』項羽本紀)

[故に先ず秦と趙とを闘わせた方がよい。]

他動詞の使動用法は、一般の他動詞用法と同じ形を取るため、判別が容易ではない。しかし、両者の間には、他動詞の目的語は通常「受事」であるが、使動用法の目的語は「施事」である、という顕著な違いが存在する。その証拠に、使動用法の場合は、使役動詞“使”を用いて兼語式の“使”＋目的語＋動詞フレーズに変換することができる。例えば、例(9)の“嘗人”、“食狗”は、それぞれ“使人嘗”[人に食べさせる]、“使狗食”[犬に食べさせる]と言い換えることができる。同様に、例(10)の“鬥秦趙”も、“使秦趙鬥”[秦と趙を闘わせる]のように言い換えることができる。このような変換は、一般の他動詞“嘗”[味わう]、“食”[食べる]、“鬥”[闘う]には認められない。

潘允中1982:229も、使動用法が語順の組み換えによって生じることを指摘する一方で、これを「使動詞」ということばに置き換えている。同様の分析は、劉景農1994、魏培泉2000、郭錫良2007、康瑞琮2008など枚挙に遑がない。陳承澤が提出した「活用」説は、使動用法の分析では既に定説になっていると言ってよい。

2.2 問題の所在

上述のように、使動用法の説明に際しては、あまたの文献資料や著書が「活用」説を採用し、使役の出どころを文中の述語に求め、「使動詞」や「致動詞」といったことばに置き換えている。使動用法を語彙レベルで処理しようと試みてきたわけである。しかし、このような分析法には疑問が残る。ここでは、次の三点を指摘しておきたい。

第一に、使役化や品詞転換の想定が困難な用例が存在することである。

(11) 公若曰：“爾欲吳王我乎？”（『左傳』定公十年）

〔公若は、「お前は私を（刺殺された）呉王とするつもりか」と言った。〕

上の例(11)における“吳王我”は“讓我成為吳王”（私を呉王とする）の意である。確かに、名詞“王(wáng)”は、“王(wàng)”〔王となる〕のように、声調を変えることで動詞に転換することがある（説明の便宜上、音声による品詞転換には適宜、現代語音（ピンイン）を付す。以下同じ）。だが、この“吳王”は特定の国の人物を指している。このような名詞が動詞に転じ、そのうえ使役化をも遂げているとは考えにくい。もう一つ用例を挙げる。

(12) 士也罔極，二三其德。（『詩經』衛風・氓）

〔男はふらふらといい加減で、その心を違えてばかりいる。〕

例(12)では、二つの数詞からなる述語が後ろに目的語“其德”〔その心〕を伴っている。この場合、述語を構成する各要素が個別に「使動詞」に転じているのだろうか、それとも述語全体が「使動詞」に転じているのだろうか。ここで表現したいのは、無論、文字通りの意味ではなく、「転々として一定しない」という意味であるから後者であろう。しかし、このような臨時の複合述語にまで品詞転換や使役化を持ち込めば、文法体系を無視したその場しのぎの説明に陥ることになる。例(11)や例(12)のような使動用法を語彙レベルで説明するのは困難であろう。

第二の疑問は、魏培泉2000などのように、音声上の交替現象を使動用法に持ち込んでいることである⁽⁵⁾。

(13) 晉侯飲趙盾酒。（『左傳』宣公二年）

〔晋侯は趙盾に酒を振る舞った。〕

(14) 聖王在上，而民不凍飢者，非能耕而食之。（晁錯『論貴粟疏』）

〔賢明な王が上にいて民が寒さや飢えに苦しまずにすむのは、王が民のために耕して彼らに飯を食べさせることができるからではない。〕

例(13)の“飲(yìn)趙盾酒”は、“使趙盾飲(yìn)酒”〔趙盾に酒を飲ませる〕の意である。つまり、この“飲(yìn)”〔飲ませる〕は、他動詞“飲(yǐn)”〔飲む〕と音声上対立する使動詞である。同じことは、例(14)についても言える。“食(sì)”〔食べさせる〕は、他動詞“食(shí)”〔食べる〕と音声上対立する使動詞である。古代語では、「清濁別義⁽⁶⁾」や「四声別義」のように、音素または声調の交替が文法的役割の相違を担うことが多かった。語の派生に関係するこの種の形態法は、使動用法の説明から切り離す必要がある。王力1965は、使動詞という用語は音声上対立する動詞が存在する場合に限って用いるべきだ

と述べている。卓見である。確かに太田1958:205が指摘するように、使動と他動の違いは語形から判別することができず、特定しにくいことが多い。しかし、どのような見方を採るにせよ、用語による混乱は避けなければならない。

第三に、「活用」説は、古代使動用法と使成式⁽⁷⁾との継承性の問題に対して納得のいく説明を与えることができない。使成式は、語彙の複音節化とともに上古漢語と区別される重要な文法形式であり、その形成過程は中古漢語における最も特徴的な現象として重要視されてきた。王力1958:403は、古代使動用法と現代語の使成式との対応関係を示すものとして、次の例を挙げている。下の左列が使動用法、右列がそれに対応する現代語である。

(15) 小之 [これを小さくする]	: 削小它
潔之 [これをきれいにする]	: 洗乾淨它
正之 [これを正す]	: 糾正它
死之 [彼を殺す]	: 殺死他
廣之 [これを広げる]	: 放寬它
活之 [彼を生かす]	: 救活他

使成式の形成要因の一つに、並列式の第二動詞として用いられていた「使動詞」が使動用法を失ったことが挙げられている（梅祖麟1991，蔣紹愚1999，魏培泉2000他）。しかし、「使動用法の消失」によって使成式の分析に大きな不都合が生じることになった。この構造を特徴づける肝心の使役の在りかが説明できなくなったのである。この問題は歴史文法のみならず、現代語文法の分野においても喫緊の研究課題となっている（後述）。

「活用」説に対する疑義は、古典の注釈を利用した張柏青1983:278,279や孫良明1994:56,57にも見られる。だが、この種の論考は極めて少ないのが実情である。

3. 本論の分析

3.1 「活用」説の由来

前節で指摘した先行研究の問題点を整理しておく。

- 一。品詞転換や使役化が想定しにくい用例が存在する。
- 二。音声上の対立によって生じる使動詞も使動用法とされている。
- 三。「使動用法の消失（自動詞化）」により、使成式の使役義の在りかが不明になった。

こうした諸問題は、統語的範疇に属する概念を語彙（形態）論の立場から説

明しようとするために生じている。なぜこのような分析が広く行われるようになったのだろうか。その主な要因は、陳承澤が『國文法草創』（1922年）の中で用いた分析法にあると考える。

島井2005：126,127や邵敬敏2006：67が指摘するように、陳承澤はもともと統語法を重要視していなかった。周知の如く、品詞論（形態論）中心の分析から文（統語論）中心の分析への転換をもたらしたのは、当時の白話文法の代表作である黎錦熙の『新著國語文法』（1924年）である。これよりも前に提示された陳の「活用」は、ラテン語文法の影響を直接受けて品詞論を文法研究の中核に据えていた時代の産物なのである。彼が自身の研究で解明しなかったのは、古代語の「字類」、すなわち品詞の分類とその用法だった。これは、当時の文法書に共通する時代的通弊でもある。

至於想修正《文通》的章士釗《中等國文典》，陳承澤《國文法草創》，楊樹達《高等國文法》，在某些方面對《文通》確有重要更正，補充和發揮，但從總的體系看，並沒有大的突破。

〔『馬氏文通』の修正を試みた章士釗の『中等國文典」、陳承澤の『國文法草創」、楊樹達の『高等國文法』について言えば、いくつかの面で『馬氏文通』に対して重要な変更、補充、創見があったが、体系全体から見れば、大きな成果はなかった。〕
（王海葵1991：210）

それでは、陳承澤が展開する品詞論は、馬建忠の『馬氏文通』（1898年）とどう違うのだろうか。品詞とは、語を文法的な観点から分類したもの、つまり、文の要素として語がもっている一定の文法機能の異同によって分類を施したものである。だが、中国語文法学の草創期には、西洋文法をそのまま模倣したために、中国語固有の特徴は考慮されなかった。『馬氏文通』は、中国語の品詞を無理に文成分（主語、述語、目的語など）と一対一の関係で対応させようとしたため、「単語には定まった品詞がない（字無定類）」という結論を導き出した。これは、「字類假借」説として知られる。これに対して、陳承澤は、「一つの単語には一つの定まった品詞がある（字有定類）」とした上で、この「本用」がさらに異なる品詞に転換し得ることを説いた。これを「活用」と呼んでいる。「本用」に対して「活用」は、あくまでも臨時の文法的手段である。龔千炎1997は、彼の文法研究を次のように評している。

他反對馬建忠模仿西方語法體系，可是自己并未能建立起完整的體系，只是談的詞類。即使在詞類方面，除了詞的活用學說外，也並沒有更多的建樹。

〔彼は馬建忠が西洋の文法体系を模倣することに反対したけれども、彼自

身は完成された体系を打ち立てることができず、ただ品詞論について論じただけだった。その品詞論の面においても、単語の活用学説以外には、これと言ったより多くの創見も見られなかった。」（龔千炎1997：49）

陳承澤の「活用」説は、「字類假借」説を修正し、発展させたものとして評価されている。だが、詳しく検討してみると、彼の説明も、ある品詞のある種の統語的機能と対等に対峙させることに変わりはない。つまり、同一の単語であっても異なる文成分になる毎に品詞転換が起きることを依然として説いている。「活用」説は、こうして必然的に「字無定類」を認めざるを得ない状況に追い込まれることになった（鳥井2005:126）。彼は『馬氏文通』の研究方法を批判してはいるが、その説明の枠組みを越えることはできなかったのである。彼の見解は、楊樹達『高等國文法』（1930年）において詳述され、その後多くの著作に採用されるようになった（周紅2005：386）。「字類假借」の誤謬は正されたにも拘らず、「字類活用」の方は、こうして今日まで踏襲されている（王海榮1991:8,9）。これは見過ごすことのできない問題である。

3.2 本論の対案とそのメリット

従来の伝統的な見方に対して、本論では、既にたびたび述べてきたように、統語論の角度から使動用法を捉え直したい。本論の見方はこうである。使動用法は、「述目構造」という句型を利用した使役義表出法である。その使役義は、語と語の意合的な関係、つまり語順から生じる。本来、使動用法には使役化も品詞転換も関与しない。「清濁別義」や「四声別義」のような形態法によって生じる使動詞の使役義は、その動詞が具える属性となる。しかし、使動用法の場合はそうではない。そこには文法的要素がなく、ただ語が並んで存在するだけである。従来の説明と比較すると、次のようになる。

従来の説明：「活用」によって臨時に使役動詞になる用法

本論の対案：述目構造を利用して、述語の後ろに臨時に目的語を置く用法
この対案を図式的に示すと、次のようになる。

(16) 古代語の使動用法： [述語] + 目的語 構造

↑

他動詞・自動詞・形容詞・名詞・数詞・方位詞

要するに、使動用法とは、述目構造の持つ型の力を利用した、意合的關係に基づく臨時の文法手段のことである。ゆえに、これは統語レベルの文法概念である。述語の詞性、すなわち文法機能は変わらない。この「ゼロ形式」の使役義は、兼語式に現れる“使”や“令”と等価である。

朱徳熙1985が述べているように、中国語の品詞と文成分の間には、単純な一対一の対応関係が存在しない。むしろ「一品詞多機能」を常態とする。こうした指摘があるにも拘らず、「活用」を駆使した分析は、古代漢語に関する著作では常に支持されてきた（白玉林・遲鐸2008:26）。教学の現場では、これは確かに効果的な説明と言えるのかもしれない。だが、当代の研究者までもが説明の簡便さ故に中国語の実像を歪めて記述しているとすれば、問題の根は深い。

使動用法の使役義は、語順によってもたらされる。本論の分析は、意動用法にも適用できそうである。

(17) a. 匠人斲而小之, 則王怒。(『孟子』梁惠王下)

[大工たちがこれをきって小さくしたならば、王は怒るだろう。]

b. 孔子登東山而小魯, 登泰山而小天下。(『孟子』盡心上)

[孔子はかつて東山に登って辺りを見下ろした時は「魯の国は小さいものだ」と感じ、泰山に登った時には「天下は思ったよりも小さいものだ」と感じた。]

両文とも形容詞“小”が述目構造の枠組みを利用して、臨時に目的語を従えている。例(17a)の“小之”は使動用法である。これは現代語に直すと“使木料變小”[木材を小さくする]となり、物理的・客観的変化を表している。一方、例(17b)の“小魯”と“小天下”は意動用法である。こちらの場合は、現代語に直すとそれぞれ“認為魯國小”[魯の国を小さいと思う]、“認為天下小”[天下を小さいと思う]となり、心理的・主観的変化を表している。a文の“小”を「使動詞」と呼ぶならば、b文の“小”は「意動詞」と呼ばなければならない。だが、このような形容詞が動詞に転換するだけでなく、「～と思う」のような知覚の意味をも獲得できるとは俄には理解しがたい。意動用法についても、本論の観点から説明するのが順当である。

また、本論の分析は、使成式との継承性の問題を合理的に説明することができる。使成式の使役義の表し方も、原理的には古代語の使動用法の仕組みと同じだからである。下に石村2010の説明を引く。

例えば、“貓咬死了老鼠”[ネコがネズミを噛み殺した]という文は、「ネコがネズミを噛んだ結果、そのネズミが死んだ」という意味内容を表している。“咬死”のような「他動詞＋自動詞」の組み合わせが「ネズミを噛んで死に至らしめる」、つまり「殺す」と、一種の状態変化使役を表すわけである。“*咬殺”のような「他動詞＋他動詞」の組み合わせは容認されない。ところが、

“咬”も“死”も、個別に見ると使役の意味とは無関係である。従来の研究では、この複合述語の使役の在りかを説明することができなかった。

使成式の使役義に関する問題は、当該構造を二つの述語が羅列した形式、すなわち連続動詞（serial verbs）と見なせば解決する。複合述語の後ろに目的語に従える統語形式は、目的語（変化対象）に対する使役力の強化を意味する。

(18) 貓 咬 死了 老鼠

↓ ① 語順の逆転による複合化

② 語彙的使役機能の獲得

現代語では、“*貓咬老鼠死了”のような兼語式と同じ語順は、不適格となる。状態変化のような高い使役性を表現する際、複合述語“咬死”全体を一語動詞に見立てた述目構造、すなわち「使動用法」を利用するのである。

この使役義の問題に関しては、第二動詞に古代使動用法が顕在化するという説が提出されている（曾仲珊1980, 龔千炎1984他）。しかし、この主張は受け入れがたい。第二動詞の詞性は変化していないし、そこに使動用法は作用していない。一部の慣用的な表現を除くと、使成式の第二動詞は、単体で変化対象を表す目的語を取ることができない⁽⁸⁾。(15)に挙げた使成式にしても、“*小它”[それを小さくする]、“*死他”[彼を殺す]、“*乾淨它”[それをきれいにする]などは不適格な表現である。目的語を取るのは、複合述語全体と解すべきである。これまで使動用法は、古代語に特徴的な文法現象であるとされ、現代語では既に消失したと考えられてきた。だが、使動用法は衰退も消失もしていない。「複音節化」したのである。石村2010は、この歴史的変遷過程こそ使成式の主要な形成経路であると主張している。

時制の一致や語形変化に富む印欧語では、形態論と統語論がはっきりと区別される。他方、語と語の意合的結合を重視する中国語の場合、両者の境界は曖昧であることが多い。詞性が固定化していない古代語ではなおのこと、他動と使動、自動と受動が同一形式になることも少なくない。「文法的意味を語順が担う」という中国語の根本的な性格は、時代が下っても保持されていると言える（石村2011）。本論の見解は、「孤立語」に見られる類型論的特徴こそ中国語文法の要諦であることを強く示唆している。

4. おわりに

本論では、「使動用法に対する誤解はどのようにして生じたのか」という根源的な問いに立ち返って、陳承澤1922 [1982] の「活用」説を批判的に検討

した。彼の分析は、統語論の視点が欠落しているだけでなく、つきつめると『馬氏文通』の「字類假借」「字無定類」と同じ考え方に行き着く。「活用」を採り入れた現行の説明は、西洋文法の直輸入から未だに脱却できていない。

使動用法は、述目構造という型の力を利用した使役義表出法である。つまり、これは、統語的範疇に属する文法概念である。述語部分は、使役機能を獲得しているわけではない。使動用法の目的語は、述目構造の枠組みを利用して臨時に述語の後ろに置かれる。当該用法が特殊とされるは、このような理由による。

意合法が発達した中国語の世界では、語彙論と統語論の境界が曖昧であることが多い。使動用法に関しても、古代語の自動と使動の関係、他動と受動の関係など文法体系に係わる諸点から多角的に調査・分析する必要がある。今後の課題としたい。

注

- (1) 鳥井2008:49によると、中国では品詞を1920年前後まで「字類」「詞品」と称していたが、それ以後はすべて「詞類」と呼ぶようになったという。
- (2) 使動用法に関する記述は、既に『馬氏文通』5.6節「内動字用若外動字」の項にも認められる。だが、そこにある用例の「止詞」（目的語）はすべて受事と解され、通常他動詞用法と同一視されている（宋紹年2004:138,167,168）。
- (3) 以下、本論に掲げる用例は、すべて既存の文献資料から引用したものである。本文に引用するにあたり、簡体字の用例は、紙本の漢籍テキストを参照して伝統字に改めた。また、これに合わせて、簡体字で書かれた文献資料の原文も、伝統字に改めた。なお、李佐豊1983:117は、使動用法を次のように定義している。

使動用法就是主語所代表的人物並不施行動詞所表示的動作，而是致使賓語所代表的人或事物施行這個動作，或致使它們產生某種結果。

〔使動用法とは、主語が表す人物が動詞の表す動作を行うのではなく、目的語が表す人や事物にこの動作を起こさせたり、あるいはそれらに何らかの結果を生じさせたりする用法である。〕

- (4) 李佐豊1994の調査によれば、使動用法は、通例、「内動詞」（非意志性自動詞）に認められる。李論文では、「使動賓語」を取る数少ない意志的他動詞として、“飲”〔飲む〕、“食”〔食べる〕の他、“衣”〔着る〕、“見”〔見る、会う〕、“從”〔従う〕等を挙げている。
- (5) 魏培泉2000は、「使動詞」には二種類あり、自動詞用法を基本形として、①これと同音のものと②声母の清濁と韻母の四声によって区別されるものがある、と述べている。そして、①のタイプを「作格動詞」（ergative verb, 能格動詞）と呼び、②のタイプをこれに含めて議論している（前掲、注6参照）。
- (6) 梅祖麟1991:130,131は、「清濁別義」では、使動詞は清音声母、自動詞は濁音声

母になると指摘する。梅によれば、この形態法は後漢に衰退が始まり、唐代にはほぼ完全に消滅したという。

- (7)「使成式」という用語を最初に用いたのは王力だが、その適用範囲は第一動詞が他動詞のものに限られる(王力1958:403)。本論でいう「使成式」とは、ある動作・行為がその対象物に何らかの状態変化を引き起こす、という使役の場面状況を表す「動詞＋結果補語」構造文のことである。
- (8) 曾仲珊1980:296,297によると、現代語に残る古代使動用法には、例えば次のようなものがある。

①動詞の使動用法

出兵 [出兵する], 動身 [出発する], 進貨 [商品を仕入れる], 振奮精神 [精神を奮い起こす], 發展生産 [生産を高める], 美化環境 [環境を美化する]

②成語や文言の表現

破釜沉舟 [飯釜を壊して舟を沈める、決死の覚悟でやる], 驚心動魄 [驚き動転する], 屈指可數 [指折り数えるほどわずかである], 成人之美 [他人の善事を成就させる], 成事不足, 敗事有餘 [事を成し遂げる力はないが、事を失敗させる力は充分にある]

③事物の名称

變電站 [変電所], 降壓器 [変圧器], 聚光鏡 [集光レンズ], 滅火器 [消火器]

参考文献

- 白玉林・遲鐸2008『古漢語語法』, 北京: 中國社會科學出版社。
- 陳承澤1922『國文法草創』(漢語語法叢書, 北京: 商務印書館, 1982年)
- 龔千炎1984「動結式複合動詞及其構成的動詞謂語句式」, 『安徽師大學報(哲學社會科學版)』第3期, 94-102頁。
- 1997『中國語法學史(修訂本)』, 北京: 語文出版社。
- 郭錫良2007『古代漢語語法講稿』, 北京: 語文出版社。
- 石村広2010「古代使動用法と使成式の繼承關係について」, 『開篇』Vol.29, 6-21頁。東京: 好文出版。
- 2011『中國語結果構文の研究——動詞連續構造の観点から——』, 東京: 白帝社。
- 蔣紹愚1999「漢語動結式產生的時代」, 『國學研究』第六卷, 327-348頁。北京: 北京大學出版社。
- 康瑞琮2008『古代漢語語法』, 上海: 上海古籍出版社。
- 李佐豐1983「先秦漢語的自動詞及其使動用法」, 『語言學論叢』第10輯, 117-144頁。北京: 商務印書館。
- 1994「先秦的不及物動詞和及物動詞」, 『中國語文』第4期, 287-295頁。
- 劉景農1994『漢語文言語法』, 北京: 中華書局。
- 馬建忠1898『馬氏文通』(漢語語法叢書, 北京: 商務印書館, 1983年)
- 梅祖麟1991「從漢語的“動、殺”、“動、死”來看動補結構的發展——兼論中古時期起

- 詞的施受關係的中立化」，《語言學論叢》第16輯，112-136頁。北京：商務印書館。
- 太田辰夫1958『中国語歴史文法』，東京：江南書院。
- 潘允中1982『漢語語法史概要』，河南：中州書畫社。
- 邵敬敏2006『漢語語法學史稿（修訂本）』，北京：商務印書館。
- 宋紹年2004『《馬氏文通》研究』，北京：北京大學出版社。
- 孫良明1994『古代漢語語法變化研究』，北京：語文出版社。
- 鳥井克之2005『中国語教学文法概論』，関西大学出版部。
- 王海菱1991『馬氏文通與中國語法學』，合肥：安徽教育出版社。
- 王 力1958『漢語史稿（中冊）』，北京：科學出版社。
- 1965「古漢語自動詞和使動詞的配對」（『王力全集』第十六卷，442-463頁。山東教育出版社，1990年）
- 魏培泉2000「說中古漢語的使成結構」，《中央研究院歷史語言研究所集刊》71.4，807-856頁。
- 楊柏峻・何樂士2001『古漢語語法及其發展（修訂本）』，北京：語文出版社。
- 楊樹達1930『高等國文法』（漢語語法叢書，北京：商務印書館，1984年）
- 曾仲珊1980「古漢語中動詞的使動用法」，《中國語文》第4期，295-297頁。
- 張柏青1983「談“使動用法”」，《中國語文通訊》第2期，23-28頁。
- 周紅2005『現代漢語致使範疇研究』，上海：復旦大學出版社。
- 朱德熙1985『語法答問』，北京：商務印書館。

（中央大学）